

飛騨みやがわ考古民俗館 30 周年記念シンポジウム

飛騨みやがわ考古民俗館の 歩みと新たな展望

発表要旨



2025 年 5 月 18 日
飛騨市教育委員会

飛騨みやがわ考古民俗館の歩みと新たな展望

場所 宮川町公民館 2 階 会議室

日時 2025 年 5 月 18 日 (日) 10:00~15:15

主催 飛騨市、飛騨市教育委員会、(一財)自治総合センター

プログラム

- | | |
|-------------|--|
| 10:00~10:05 | 下出尚弘教育長あいさつ、趣旨説明 |
| 10:05~10:40 | デジタル技術で地域へ・未来へつなぐ飛騨みやがわ考古民俗館
野口淳氏 (公立小松大学) |
| 10:40~11:15 | 旧吉城郡宮川村の埋蔵文化財調査と飛騨みやがわ考古民俗館
林直樹氏 (関高等学校) |
| 11:15~11:50 | “民具愛”でまちづくりー福島県只見町の活動報告ー
新国勇氏 (福島県只見町) |
| 11:50~12:10 | 宮川で積雪地域の民俗文化財 (民具) を集めていたころ
インタビュー形式
金山勝彦氏、森下真次氏、林直樹氏、山田昌久氏、三好清超 |
| 13:00~13:15 | 宮川小による飛騨みやがわ考古民俗館のガイド活動の意義
宮川小学校一同 |
| 13:15~13:50 | 民俗誌研究の前線ー岩手県遠野市・宮崎県椎葉村での研究/生活ー
森内こゆき氏 (宮崎県椎葉村) |
| 13:50~14:25 | 1995 年からの飛騨市内での民俗誌調査・実験考古学の展開
山田昌久氏 (東京都立大学) |
| 14:25~15:10 | トークセッション「資料との関わりは。そのための活動を知ってもらうには。」 |
| 15:10~15:15 | クロージング |

目次

- デジタル技術で地域へ・未来へつなぐ飛騨みやがわ考古民俗館 野口淳 (1)
- 旧吉城郡宮川村の埋蔵文化財調査と飛騨みやがわ考古民俗館 林直樹 (9)
- “民具愛”でまちづくりー福島県只見町の活動報告ー 新国勇 (11)
- 民俗誌研究の前線ー岩手県遠野市・宮崎県椎葉村での研究/生活ー 森内こゆき (15)
- 1995 年からの飛騨市内での民俗誌調査・実験考古学の展開 山田昌久 (23)

例言

1. 本書は、飛騨市が (一財) 自治総合センターの助成を受けて 2025 年 5 月 18 日に実施する、飛騨みやがわ考古民俗館 30 周年記念シンポジウム「飛騨みやがわ考古民俗館の歩みと新たな展望」の発表要旨集である。
2. 本書の編集は、飛騨市教育委員会事務局文化振興課の三好清超が担当した。
3. シンポジウムの開催にあたり、講師の方々から多大なるご協力をえた。深く感謝の意を表したい。

デジタル技術で地域へ・未来へつなぐ飛騨みやがわ考古民俗館

野口 淳（公立小松大学次世代考古学研究センター）

1 デジタル技術と博物館・博物館資料

さまざまな分野でDX（デジタルトランスフォーメーション）の必要性がますます高まっています。DXとは、資料や情報をデジタルに変換する、またはデジタル機器や手法を利用するデジタル化にとどまらず、それにより人びとに新たな知識や経験をもたらす、システムや社会を変容することを意味します¹⁾。

博物館や博物館資料については、2023年に施行された改正博物館法でデジタルアーカイブの作成と公開が博物館の事業として明確に位置づけられました²⁾。これからの博物館は、実物資料とその目録、それらをデジタル化した情報を備え、活用することが求められます。

それでは博物館資料とその情報のデジタル化とはどのように行われるのでしょうか？まず大事なものは、何が、どのような状態で、どこに・どれだけあるのか？についての目録情報です。民具・民俗学資料であれば、その来歴、所有者と使用者、使用方法その他についての情報も付随するでしょう。それらは文字と図・写真として整備され、利用されてきました。

デジタル化時代に入って、動画や位置情報、材料や技法に関する分析データ、さらに物質的なかたちのある有形資料については形そのものの3Dデータが加わり、資料そのものと合わせて保管されることで、資料の意義や価値をより詳細に評価することが可能になります。これがデジタルアーカイブの意義となります。

私自身は考古学者なので、かたちのある有形資料としての土器や石器を研究します。そのための記録とデータの取得において3Dデータが有効であると考え、ここ数十年、さまざまな考古学資料や遺跡の3D計測を行ってきました。さらに最近では、博物館資料の3D計測をきっかけとして、社会教育施設としての博物館活動に3D計測を取り入れることにも挑戦しています。

実は、そのきっかけとなったのが飛騨みやがわ考古民俗館であり、そこで活動する石樺クラブでした。

2 飛騨みやがわ考古民俗館の先駆的な取り組み「3D合宿」

きっかけは新型コロナウイルス感染症の蔓延による外出制限です。飛騨みやがわ考古民俗館でも来館者を迎えることが困難になったので、代わりにYouTubeから館内を案内する試みが企画されました。しかしガラスケース越しに立体物である考古資料を映して動画配

信するのはなかなか難しいものでした。

3D データを整備して公開すれば、現地に来られなくても博物館資料を見てもらうことができる。飛騨市での取り組みの出発点です。そして飛騨市では、ただ計測と公開進めるだけでなく、それがどんな意義を持つのか、どのような可能性を持つのかについて掘り下げることを目指しました。そこで私が、都竹市長との対談の中で提案したのが市民参加による3D 計測です³⁾ (写真1)。

これは飛騨市の関係案内所ヒダスケ!で「石棒クラブ飛騨みやがわ考古民俗館で3D データ化のお手伝い&技術も習得しちゃう合宿」(2021 年11 月)として実現⁴⁾、以来4 年間、毎年定期的に開催され、小学生から大人まで、また飛騨市内だけでなく全国各地からの参加者を集めています (写真2)。

単発的なイベントに終わらなかったことで、「石棒クラブ3D 合宿」は多くの成果を上げています。

- ・全国各地からの参加者が飛騨市とつながりを持つようになった (関係人口)

- ・博物館資料3D 化の機運を高めた

- ・3D プリントやXR の活用へと展開した⁵⁾

- ・GIGA スクールと連携して学校教育で利用されるようになった

- ・飛騨みやがわ考古民俗館の認知度が高まり来館者数が増加した

- ・ふるさと納税 (飛騨みやがわ考古民俗館の茅葺き民家を保存・活用する事業) への寄付額が大幅に増加した

このように枚挙にいとまがありませんが (三好 2022,



写真1 都竹市長との対談



写真2 3D 合宿

2024, 2025, 三好・佐々木 2023)、ここでは参加型の活動がもたらす効果に注目したいと思います(野口 2024)。

3 参加型活動が変える博物館と利用者の関係性

博物館資料は通常、ガラスケースの向こう、または一般来館者が立ち入れない収蔵庫に置かれており、ごく一部の専門家を除くと身近な暮らしからは隔絶した存在です。学芸員、専門家が、どれだけ市民への普及を説き、奮闘しても、博物館という仕組みが変わらない限りこの距離は埋まるものではありません。

専門家としての学芸員が選別し、構成した展示空間において、一般来館者はあくまで客体であり、用意された情報を一方的に受け取るだけになりがちです。これを克服するために、体験型、相互作用型の展示が試みられています。しかしそこでも、資料の希少性や脆弱性によって、「専門家だけが取り扱える」という壁が立ちはだかります。

これについて路上博物館の森健人氏は、博物館と図書館の対比から説き起こしています。図書館では、一部の稀覯書を除けば原則として、来館利用者が自由に書籍を検索し、手に取って閲覧することが可能です。しかし博物館においてそうした営みが許されているのは、多くの場合専門家、研究者だけです。資料を観察、記載し、写真を撮影してそれらを公開するという営みは市民に対して開かれていません。

飛騨みやがわ考古民俗館での3D合宿では、専門家である市の学芸員のレクチャーと監督のもと、参加者は展示ケースや収蔵庫から取り出された資料に直接対峙し、博物館デジタルアーカイブの構築に、一員として参加します。ただ作業をするだけでなく、夜にはデータの利用方法についての議論に参加し(図3)、完成したモデルは作成者個人のクレジットも付して公開されます(図4)。

公開されたモデルは前述の通り、学校教育やXRなどでも活用されています。つまりこれまで、実質的に専門家だけに閉じていた博物館資料の記録・公開・利活用的一端に市民が確実に参加する道が開かれたのです。

資料に触れ、最新技術による記録を担うという体験は、参加者にどのような変化をもたらすでしょうか。博物館資料そのものの、その背景にある歴史・文化だけでなく、地域資料を活用できるように保管するという博物館の役割にも理解が及ぶことで、資料、地域、そして博物館の存在に対する受容、さらに愛着の形成に至ります。

この取り組みについては飛騨市教育委員会の三好さんにより「関係人口」の構築がキーワードとして繰り返し語られていますが、実は3D合宿に参加するだけでは「交流人口」にとどまると言えます。そこでの体験が参加者自身にフィードバックすることで、地域だけでなく博物館という存在にとっても「関係人口」が構築されることにつながるのです。



図3 3D 合宿での議論の様子



図4 公開データに著作者を明記

4 民具資料への関心の動線

飛騨みやがわ考古民俗館での活動をふまえて、地域とのつながりを見据えた展開を試みたのが長野市立更北中学校ものづくり部理科班による長野市立博物館の民俗資料 3D デジタルアーカイブ化の試みです。中学校の地域学習や部活動との連動による教育的効果と同時に、地域資料に積極的に関与するという体験を重視したものでした（野口ほか 2024）。

この試みは、IT 関連企業などの協力も得て博物館でのワークショップとその書籍化に至っています（長野市立更北中学校ものづくり部理科班 2024）。出版されたドキュメンタリー漫画に、この取り組みの効果が明確に描かれています。

まず参加した中学生のほとんどは、博物館や地域文化に決して強い関心を持っていませんでした。実際、事前のヒアリングでは、博物館は学校の団体見学で来たことがある程度、展示室の滞在時間は説明を聞く間だけというのが多数でした。とはいえ、学校での授業や部活動のテーマとして、地域の歴史・文化とその関連資料に関心を持っている参加者もいて、活動の軸になっていました。

それでも、参加者を博物館とその資料に強く牽引したのは、スマートフォンアプリでの 3D スキャンという体験でした。当初、多くの参加者は 3D スキャンをいかに上手にできるかに関心の焦点があり、また AR などでも楽しむという側面に惹かれていたところもありました。対象とした民具資料への関心は決して高くなく、それらの地域における意義を説明してもしっかりと聞いてもらえる状況ではなかったのが実情です。

しかしひとたび博物館展示室でのスキャンがはじまると、スキャンを成功させるためには対象のかたちや状態をよく把握しないといけないというところからスタートして、やがて展示解説にまで関心が広がります。ここまで至ると、民俗学が専門の学芸員による解説もどんどん吸収されるようになっていきます。

ここでは、従来の学校授業や博物館展示解説などで一般的だった、学術または教育上の

目的を達成することを目指す専門家または教育者による一方向的な真逆と言ってよい過程が良く作用しています。博物館と資料に決して関心があるわけではない参加者に、スマートフォン3Dスキャン、AR、さらに動画作成などそれぞれの関心に近い部分を入り口として、そこから目的とする地点へと誘うというルートです。

さらに博物館デジタルアーカイブ構築に参画するという活動目的から書籍化に取り組んだのですが、その中で参加した生徒たちから出てきたアイデアは、民具について現代的な視点からキャッチフレーズをつけるというものでした。実際問題として、参加者にとって展示されている民具はもはや、自分たち自身だけでなく両親、さらにその上の祖父祖母の世代にとっても日常的な暮らしで接してきたものではなくなくなっています。

5 民具コレクションは現代社会の中にどのように位置づけられるのか？

生活環境の急激な変化の中で、生きた生活の道具であった民具が、博物館に修造展示されているものに触れるだけの存在に急速に変わっています。2020年代の現時点の現役およびこれから世代にとって、民具とは、帰属する時期・時代が近世～近現代というだけで、歴史・考古資料と同じカテゴリとして認識されるようになっていくのです。

この点については、本シンポジウムの事前打ち合わせにおいても議論されたところです。もちろん民俗学や地域史・文化史の観点から「継承」が重視されるべき側面もあるでしょう。一方で、民具を収集し保管し続けるという目的を達成するためには、それらが現代社会の中でどのように認識され受容されるのかを問い直す必要があります。

長野市立更北中学校と長野市立博物館の事例では、書籍化にあたってのキャッチフレーズ作成の際に専門家としての学芸員の協力により適切でない表現について自分たちで考え直すといった経験も得ることができました。しかしそこで行われたのは、昔の暮らしを知り、再現し、継承することを主眼とするものではなく、現代社会に生きる自分たちから見たい民具の理解、位置づけです。

かつて民具がまだ生活の中に生きていた時代、またはそれからあまり時が経たず記憶を共有し継承することができた時代から、コレクションを保管する社会にとって直接のつながりが失われてしまった時代に、私たちは足を踏み入れています。

それでも民具は、グローバルな商業資本主義が展開する以前、各地で環境や歴史的伝統をふまえて継承されてきた生活の多様性を伝える貴重な資料であり続けます。それは過去の暮らしに憧憬を抱く人たちだけのものではありません。生物の種の多様性の保全が、健全な地球環境の維持に不可欠であるように⁴⁾、私たちの暮らしの道具や技術についても多様性を保全することは重要です。その点で民具は、歴史・考古資料とあわせて、地域における生活・文化の長期的なアーカイブを構成する要素として位置づけられるのではないの

でしょうか。

6 民具コレクションが抱える課題を克服するために

近年、民具資料の収蔵保管についてネガティブな報道が目につきます。有形物としてスペースを必要とするだけでなく、有機物として保存環境の維持にもコストがかかります。必要なものだけを選別して他は廃棄せざるを得ないという現実もあります。

そのような中で民具コレクションが抱える課題のひとつに、資料の目録、データベースの整備が、資料の利活用可能性に結びつく形で進んでいないというものがあります。先に指摘した生活・文化の多様性保全のためのアーカイブを機能させるためには、そうした目録が整備されているのは前提であると同時に、その目録に基づいて資料が利活用できる状態になければなりません。

目録・データベース作成には当然、専門的な知識と技術が必要です。一方で、市民参加でサポートできる側面も少なくありません。飛騨みやがわ考古民俗館での3D合宿や、長野市立更北中学校と長野市立博物館の取り組みのように、3Dデータを取得してデジタルアーカイブに組み込むことに市民参加を募ることは間違い無く可能です。他にも専門家と市民の協働が可能な領域はまだあるはずです。

加えて、データベースやデジタルアーカイブのあり方についても再考の余地があります。現在主流のデータベース・デジタルアーカイブは、項目別のポータルか、文字による検索がインターフェースの基本となっています。ここから民具資料にアクセスするためには、前提となる知識、情報がなければ、どこから手をつけて良いか分からずに終わってしまいます。

最近では画像検索も導入されつつあります。立体的なかたちを持つ有形資料の場合、3Dデータはさらに直感的な検索を可能にするでしょう。市民参加による3Dデータの蓄積が、デジタルアーカイブの仕組みを変えることになるかもしれません。

また現在私たちは、飛騨みやがわ考古民俗館の展示室だけでなく、収蔵庫まで丸ごと3Dデータ化し、デジタル的な複製（デジタルツイン）を公開するところまで迫り着きました⁹⁾。実際の空間の中を移動すると同じ感覚で、資料を見て、探すことも可能になります（図5）。



図5 収蔵庫の3Dデータを公開

今後は、文字ベース、画像ベース、さらに3Dを含むデータベースと連携することで、展示されているものと関連する資料が収蔵庫のどこにどのような状態であるのか、専門家でなくても誰でもわかるようになります¹⁰⁾。さらに、展示室・収蔵庫デジタルツインでふと目についた資料が何であるのか、類例や関連する文献はどこにあるのかをシームレスに検索することも可能になるでしょう。これが私たちの目指す、目録に基づいて資料が利活用できる状態、誰にでもそれができる状態です。

それは路上博物館の森健氏が指摘した図書館と博物館の違いを超えて、図書館のような博物館を実現する第一歩にもなるのでしょう。そのような未来につながる博物館の姿を、地域につながる民具コレクションを一つの鍵として飛騨みやわ考古民俗館で模索することの面白さをより多くの人に知っていただき、参加していただくことが私たちの目指すところです。

注

- 1) 野口 淳「文化財 DX の基本 1 文化財 DX ってなんだろう?」<https://www.n-bunkazaihogojp.jp/2025-4-12/> 日本文化財保護協会文化財 DX ページ
- 2) 文化庁博物館総合サイト「法改正で変わる日本の博物館」
<https://museum.bunka.go.jp/law/>
- 3) 「石棒を3D化することの未来」文化財×テクノロジー講座&クロストーク
https://www.youtube.com/live/EcLsnAKd8-Y?si=rg1P9h_NdOTDrwEw 飛騨市公式チャンネル
- 4) 「ヒダスケ初合宿!?石棒クラブ文化財の3Dデータ化をお手伝い」
<https://hidasuke.com/2021112728report/> ヒダスケ! 飛騨市の関係案内所
- 5) 石棒クラブでは、3Dプリントと3Dモデルのウェブ公開を組み合わせた取り組みとして「石棒神経衰弱」を開発、各所で好評を得ている(井上ほか2025)。
- 6) 石棒クラブ on Sketchfab <https://sketchfab.com/sekibo.club>。2025年4月29日時点で99点の3Dモデルが公開されている他、3D合宿参加者個人のアカウントから公開されているものを含めると120点以上が公開されている。
- 7) 「ぼくらのみんキャプデジタル博物館」<https://books.minc.app/bokuhaku> みんキャプ
- 8) 「生物多様性のめぐみ」みんなで学ぶ、みんなで守る生物多様性
https://www.biodic.go.jp/biodiversity/about/biodiv_service.html 環境省自然環境局生物多様性センター
- 9) 「【岐阜県飛騨市】24時間世界中いつでもどこからでも文化財にアクセス! 飛騨市の主

要文化施設をバーチャル空間で公開」

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000080.000120394.html> PR TIMES、展示室デジタルツイン <https://my.matterport.com/show/?m=ocHyhzN3zC8>、民俗資料特別収蔵庫デジタルツイン <https://my.matterport.com/show/?m=ThHa3Nzi7wk>

10) 「国立歴史民俗博物館と飛騨市が歴史資料データ公開に関する覚書を締結」

<https://www.city.hida.gifu.jp/site/koho/2024-07-18-2.html> 飛騨市

引用参考文献

井上隼多・橋本真之介・小林遼香・中嶋大倫・保谷里歩 2025「文化財 3D データを活用したユニバーサル・ワークショップ「石棒神経衰弱」の挑戦」『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用 7』奈良文化財研究所報告第 44 集

<https://sitereports.nabunken.go.jp/online-library/report/69>

長野市立更北中学校ものづくり部理科班 2024『ぼくらのみんキャブデジタル博物館：長野市立博物館修造展示資料の 3D アーカイブ』デザインエッグ

<https://www.amazon.co.jp/dp/4815042411>

野口 淳 2023「市民参加による都市と文化財のデジタルアーカイブス」『情報処理』65(1) <https://doi.org/10.20729/00231419>

野口 淳 2024「次世代技術が変える未来の考古学・博物館」『博物館 DX と次世代考古学』雄山閣

野口 淳・村野正景編 2024『博物館 DX と次世代考古学』雄山閣

野口 淳・高田祐一・三好清超・佐々木宏展 2024「3D データと書誌データを軸とした考古学・博物館資料のデジタル化、LOD 化とパブリック化」

<https://kemco.keio.ac.jp/all-post/20240408/>

三好清超 2022「関係人口と共働した文化財と博物館資料の活用－飛騨市モデルの報告－」『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用 4』奈良文化財研究所報告第 33 集 <https://sitereports.nabunken.go.jp/ja/article/63521>

三好清超 2024「収蔵資料のデジタル化と仲間づくり－石棒クラブと飛騨みやがわ考古民俗館の取組み」『博物館 DX と次世代考古学』雄山閣

三好清超 2025「文化財デジタルアーカイブで社会はどのように変わったか」『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用 7』奈良文化財研究所報告第 44 集

<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja/search-online-library/p/2/item/74>

三好清超・佐々木宏展 2023「博物館資料の学校現場での活用と展望」『考古学ジャーナル』791

旧吉城郡宮川村の埋蔵文化財調査と飛騨みやがわ考古民俗館

林 直樹（岐阜県立関高等学校）

はじめに

1990年代、当時の吉城郡宮川村では、国道360号線バイパス工事に伴う緊急調査として、宮ノ前・堂ノ前・家ノ下の3遺跡、さらに村の観光開発に伴う緊急調査として、塩屋金清神社・杉原瑞徳遺跡の2遺跡、計5遺跡の調査が行われ、結果的に「発掘ラッシュ」とでも呼ぶべき事態を迎えた。

いずれも縄文時代を主体とする時代の遺跡であり、発掘調査の成果がメディアでも次々と取り上げられ話題となった。一方で、膨大な埋蔵文化財をいかにして保管し、活用すべくについて、役場内部で真摯な議論が続けられ、結果、飛騨みやがわ考古民俗館が建設されるにいたった。本稿では、その歩みの一端を紹介したい。

1 緊急調査の開始と経緯

富山と飛騨を結ぶバイパスの全線開通を急ぐ村は、工事に伴う埋蔵文化財の緊急調査にも積極的であった。1989年夏には、南山大学による宮ノ前遺跡の試掘調査が行われ、90年度以降は、著者が、県からの派遣職員として村役場に籍を移し業務にあたることとなった。

当初は2年の予定であったが、発掘区の拡大等の諸事情により、派遣期間は都合7年に及んだ。その間、著者が調査に関わった4遺跡の概要は以下の通りである。

<宮ノ前遺跡> 西忍地区に所在する。村内では比較的広闊な河岸段丘上に形成された遺跡である。水成堆積層中に旧石器時代から縄文早期にかけての文化層が検出されたことや、植物・昆虫遺存体や木製遺物が出土したこと、跡津川断層の活動痕跡が認められたことなど、話題性に富んだ遺跡でもあった。上層からは、前期・中期・後期の遺構も検出されており、長期にわたって利用された遺跡であったことが判明している。

<堂ノ前遺跡> 野首地区に所在する。跡津川断層が河川と段丘を斜行しており、遺跡内の堆積土にも、地震活動による洪水堆積の形跡がみられる。下層からは、縄文早期・前期の文化層が、上層からは主に縄文中期中葉の集落跡が検出されている。中期土器には、北陸・信州双方の影響がみられるが、前者の影響がより濃厚である。

<家ノ下遺跡> 林地区に所在する。河川本流に面した低位段丘上に位置し、浅い堆積土中から、住居跡や配石、土坑等の遺構が検出されている。土器年代は、おおむね縄文後期中葉から晩期中葉を示す。土器には北陸の強い祭祀に供されたと考えられる御物石器や石冠、石刀が多数出土している。当該時期の精神文化をうかがう上で興味深い資料といえる。

<塩屋金清神社遺跡> 塩屋地区に所在する。早くも明治年間から、石棒が多数出土する遺跡として知られていた。南山大学の試掘（1973）の際、縄文後期土器とともに、原石や未製品が出土したことから、石棒製作址の可能性が示唆されていた。1993年度より本格的な調

査が開始され、千点を超す石棒（破片を含む）や大量の製作道具類（たたき石・砥石）が、縄文後期前葉の土器とともに検出された結果、石棒製作址であることが明らかにされた。

2 飛騨みやがわ考古民俗館の建設

膨大な出土遺物の保管や貴重な調査成果の活用をどうするか。対応に迫られる中、当時の道下則明村長から、出土文化財管理センター（文化庁管轄）の補助申請を行うよう指示を受けた。県文化課を通じ、文化庁に問い合わせたところ、保管庫以外に展示スペースとしての活用も認められるとのことであったので、保管・展示の双方を兼ねた「収蔵展示」の方法を取り入れるなどの工夫を交え、博物館建設の構想を練ることとなった（ガラスケースの収蔵展示はのちに地震の被害の原因となったが、阪神淡路以前であり、この時には想像すらつかなかった）。

出土文化財管理センターをどこに建設するべきか。国指定重要民俗文化財の公開施設として知名度を挙げつつあった郷土文化伝習館付近か。あるいは、温泉やまんが図書館で注目を浴びていた「飛騨まんが王国」の敷地内か。より多くの見学者を集めるのであれば後者であるが、既存文化施設との一体管理、コンビネーションを考慮して、前者と併設した博物館施設としての整備を推進することとし、名称も「飛騨みやがわ考古民俗館」とした。

博物館構想が持ち上がった当初は、石棒に特化した展示内容を検討していたが、宮ノ前遺跡下層包層が検出されるに及んで、旧石器時代末から縄文全時代を概観する展示や、宮川の縄文文化を特徴づける展示に切り替えた。

時代こそ違え、近現代の民俗資料、先史の考古資料の展示からは、豊かな自然に支えられた先人の、たくましくしたたかな生活ぶりを感じ取ることができると思う。

おわりに ～今後の展望～

1996年度をもって宮川村勤務は終了し、著者は高校の教育現場へと復帰した。その後も、報告書・啓発書の刊行、考古・民俗の調査、岐阜県史編纂事業等、断続的ではあるが、考古民俗館と関わりをもち現在にいたっている。飛騨市誕生（2004）以後は、学芸員の三好清超氏が、八面六臂の活躍ぶりで考古民俗館の価値を高め、全国規模で注目を集める施設となっている。関係者のひとりとして、嬉しく誇らしく思う次第である。

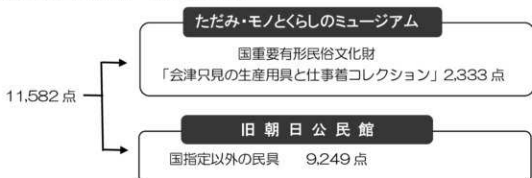
2018年以降、著者は、郷土の歴史や文化を探究する地域研究部の顧問となり現在にいたっている。この間、部員とともに、幾度か考古民俗館や収蔵庫を訪れた。宮川流域の豊かな自然や膨大な文化財、今も伝統的な暮らしを守る方々と触れ合った生徒たちは、イメージ豊かに、学びを深めることができた。

現在、考古民俗館では、小学生が案内役を務めるイベントが行われていると聞く。好ましい企画であると思う。子どもや若者の学びの場としての整備を期待したい。現在、本校地域研究部の部員は、前近代の越中西街道に強い関心を寄せている。近いうちに、著者も部員とともに、古い街道の痕跡を訪ねたいと思う。

“民具愛”でまちづくり — 福島県只見町の活動報告

ただみ・モノとくらしのミュージアム運営協議会長 新国 勇

- 只見町の民具（すべての調査カードは町民が記録済み）



- 「只見方式の民具整理」とは …… 町民自らが、民具を収集・整理し、記録する方式
- 「只見町民具保存活用運動」とは …… 民具を収集・整理・保存し、次世代に継承する運動
- 只見町の民具整理が成功モデルとなった理由
- ① 町民・行政・研究者が一体化
 - ② 徹底したマニュアル
 - ③ 町の財政的な支援
- これからの只見の民具
- 民具整理の継続 → 学術的価値を高める
- 住民や学校にアピール → 文化財的価値を知る
- 民具に自信と誇りをもつ → 民具の活用
- 只見町民が民具を大切にする理由
- ① 伝統的な暮らしを残している
 - ② 多世代同居で、知識が受け継がれている → 民具への「愛着」が深い
 - ③ 学術研究により民具が高く評価されている
- 只見町のまちづくり
- 学術調査によるまちづくり → 別紙 1、別紙 2 参照
- ◎ 住民をまちづくりに巻き込むには？
- ① 発信する（マスコミ・ネット・広報紙など）
 - ② 啓発する（講演会・見学会・シンポジウムなど）
 - ※ 首長、役所職員、議員、住民、生徒ごとにおこなう
 - ③ 誇りを持たせる（研究者・マスコミ・ネットによる評価）
- “アクション”と“アップデート”が大切

只見町の学術調査 と 民具整理のあゆみ

第 1 次 町 史 編 さん

- 1962年(昭和37年) 「只見町郷土史研究会」「只見町沿革史起草審議会」が発足する
 1964年(昭和39年) 『只見町郷土資料集』全9集を刊行する〔～1968年(昭和43年)〕
 1965年(昭和40年) 民具収集が公民館活動によってはじまる
 1966年(昭和41年) 只見町社会教育委員会の目標に「民俗資料の発見と保存」が掲げられ本格的な収集がおこなわれる
 1968年(昭和43年) 『第1次只見町振興計画』に「歴史資料館の建設」が明記される
 1969年(昭和44年) 明治百年記念事業において収集した民具を旧只見公民館で展示する
 1970年(昭和45年) 集中豪雨により移転した4集落の民具を収集し保管する
 1971年(昭和46年) 『図説会津只見の歴史』を刊行し、収集民具を掲載する
 移転集落の民俗調査を行い『南会津只見町過疎部落の民俗』を刊行
- 1982年(昭和57年) 窪田遺跡の発掘調査がおこなわれる〔～1985年(昭和60年)〕
 1983年(昭和58年) ダム建設によって水没する石伏集落の民具を旧入叶津分校に保管する
 「明和の民俗を語る会」が『むらの思い出』を刊行するかたわら民具の収集・整理をおこなう〔～1986年(昭和61年)〕
 1984年(昭和59年) 『湖底に沈む奥会津石伏の歴史と民俗』を刊行する
 1987年(昭和62年) 『窪田遺跡—縄文時代・弥生時代の集落跡、再葬墓』を刊行する

第 2 次 町 史 編 さん

- 1989年(平成元年) 只見町史編さん事業がはじまる〔～2003年(平成15年)〕
 ※ 町史本巻6冊、町史資料集5冊、文化財報告書7冊を刊行する
 1990年(平成2年) 民具整理が本格的にはじまる
 1991年(平成3年) 4,417点の整理と分類が完了 ※「只見方式の民具整理」が注目される
 1992年(平成4年) 『図説会津只見の民具』を刊行する
 1996年(平成8年) 「只見町昔ばなしの会」が発足する
 1998年(平成10年) 「只見町民具と語る会」が発足する ※「民具整理保存活用運動」が注目される
 2002年(平成14年) ブナ林総合学術調査事業がはじまる〔～2004年(平成16年)〕
 2003年(平成15年) 『会津只見の生産用具と仕事着コレクション』2,333点が国重要有形民俗文化財に指定される
 神奈川県 21世紀 COE プログラムで、只見町の民具、民俗、文書、景観などの総合学術調査がおこなわれる〔～2008年(平成20年)〕
 2005年(平成17年) 第1回世界ブナ・サミットを開催する
 「只見町民具と語る会」が町から功労表彰を受賞する

さ ま ざ ま な 学 術 調 査

- 2006年(平成18年) 「只見町ブナセンター」が発足し、「自然首都・只見」を宣言する
 『第6次只見町振興計画』に「ブナと生きるまち」が理念として掲げられ、「民具収蔵展示施設の建設」が明記される
 2007年(平成19年) 「只見町公認自然ガイドインストラクター」の養成がはじまる
 2008年(平成20年) 「第2回世界ブナ・サミット」「子どもブナサミット」を開催する
 2009年(平成21年) 「ただみ・ブナと川のミュージアム」が開館する
 2012年(平成24年) 自然首都只見学術調査助成金事業がはじまる
 2013年(平成25年) 「只見学推進事業」がはじまり、只見学検定が実施される
 2014年(平成26年) 「只見ユネスコエコパーク」に登録される
 2022年(令和4年) 「ただみ・モノとくらしのミュージアム」が開館する

別紙2

※ 白抜き文字は、住民への働きかけを示す

第2次町史編さん

ましまとまな学術調査

1989 ~ 2005

- ・『**「見」おもしろきガイドブック**』を刊行
 - 広報紙への連載
 - 自然観察会の開催
 - シンポジウム講演会の開催
 - 自然ガイドブックとインターネットの作成

『第6次只見町振興計画』
左筆字(2006)

「ブナと生きるまち」を
理念に掲げ「民具収蔵展
示施設の建設」を明記

只見の民具が国重要文化財に指定(2003)

「自然首都・只見」
宣言(2006)

「只見ユネスコエコ
パーク」登録(2014)

ただみ・ブナと川のミュージアムが開館（2009年）

ただみ・モノとくらのミュージアムが開館(2022年)

【発表の流れ】

はじめに__研究の出発点

1. 民俗学とは何か__2つのフィールドにおける「民俗」
 2. 民俗文化と地域づくり① 岩手県遠野市の事例
 3. 民俗文化と地域づくり② 宮崎県椎葉村の事例
- おわりに

はじめに__研究の出発点

発表者は、「資本主義の限界のただ中にある今、わたしたちはどのような社会のしくみに活路を見出すべきか」という問いを研究の出発点としてきました。資本主義の限界とは、例えば、環境問題や経済格差、エッセンシャルワーカーの貧困・子育てによる貧困、過労問題といった、ひと昔前から現在に至るまでずっと解決されないままにちこちで噴出しつづけている社会問題のことです。資本主義と資本拡大をすすめるネオリベリズムは、科学技術革新によってわたしたちの生活をよりいっそう楽にする、よりいっそう豊かにすると考えられていましたが、そうではないことが明らかになってしまったのが今の時代なのではないでしょうか。一見個人ひとりひとりの責任に思えるような問題も、実は社会のしくみが原因となっていることがあります。

これら問題を解決するヒントが、それぞれの土地の風土にみあった暮らし、すなわち民俗文化のなかにあると発表者は考えています。そこで、各地に暮らし人たちの“ふつうの日常”の暮らしぶりを観察するフィールドワークを実践してきました。わたしは住み込みで長期間フィールドワークを行うことが多いので、研究をしながらその土地で生活することにもなります。本発表では、フィールドにおける研究者としてのわたしの見聞と、生活者としてのわたしの経験の双方をご覧いただきます。わたしたちの暮らしと、わたしたちのまちの博物館を今どうするのか、検討するための材料としていただけますと幸いです。

「資本主義とはまったく異なった人間と自然の物質代謝の管理の仕方が__それがたとえ伝統や慣習に基づく制度によるものであり、近代自然科学による自然法則の認識によって意識されていなくとも__より持続的な生産を可能にしており、その力が資本に対する抵抗の物質的基盤になりうる」

斎藤幸平『大洪水の前に』317頁

1. 民俗学とは何か__2つのフィールドにおける「民俗」

わたしには2つの調査地があり、そのどちらもが民俗学史上重要な役割を演じてきた地域です。その2つの調査地というのは岩手県遠野市と宮崎県椎葉村であり、両地域に共通しているのは、日本民俗学の祖・柳田国男が著した作品の舞台であるという点です。両地域では、それぞれのしかたで民俗学と民俗文化を生かした地域づくりが実践されてきました。本発表では、2つの地域を比較しつつ、それぞれの地域における民俗研究の現在をお伝えできればと思います。ここではまず、遠野と椎葉について紹介しながら、そもそも「民俗学」とはどういった学問であるかを検討してみます。

『後狩詞記』に書き留められた山言葉や儀礼作法の一部は、現在でも椎葉の踊師たちによって継承されています。実際に、狩猟に限らず焼畑農業や芸能祭祀（神楽）など、多くの自治体で消滅してしまった民俗文化が今も生活のなかに息づいているところが椎葉村の特異性です。椎葉村では、明治期の時点で柳田が消滅すると懸念していた民俗事象が、今なお生活のなかに残されているのです。



椎葉神楽祭の神事「板おこし」（上、2023）
踊師が諏訪の祓を唱え、猪を捌き山神と参加者に
振る舞うところから祭りはじまる



「仙人の棚田」と称される椎葉村の棚田（右、2023）

柳田国男が『後狩詞記』と『遠野物語』にのこした民俗学という学問の特徴は何でしょうか。民俗学は、第一に、すべての人間の生活者としての側面、つまり暮らしを研究対象にしています。この点において、歴史学と民俗学は対照的です。「歴史」とは、時の為政者の視点から描かれた過去の出来事の羅列です。「歴史」からは社会の大多数を占める一般人の生活が取りこぼされてしまっています。そこで、**地域社会の担い手であった無数の名もなき人々、文字の読み書きのできない平民、貧しい農民の視点から、これまでに見えてこなかった新たな歴史を描く民俗学**を志しました。『後狩詞記』はまさに平民の生活誌を描いたものと言えます。

さらに、柳田の研究概念であった「常民」は、「歴史」が孕む身分差や階級差を乗り越えつつ、よりいっそう普遍的に、すべての日本人に共通する生活の思想（精神性）を示します。柳田が『遠野物語』に著されたような民間伝承を蒐集したのは、物質文化のみならず心意伝承を記録分析することを重視したからです。ところが、民俗学は一国一民族をと定めるナショナリズムと関係する「民族学」とも異なる立場をとります。民俗学は、日本列島各地の風土にあわせたそれぞれの地域文化の個性を採取します。つまり、**日本文化の複数性を丹念に記録しようとする学問**であると言えます。

2. 民俗文化と地域づくり① 岩手県遠野市の事例

以上のように、わたしが調査対象とする2つの地域は、柳田国男にはじまる民俗学史との少なからぬ影響関係のもとに地域づくりを実践してきました。そこで次に、わたしがそれぞれの調査地で発見した民俗学と地域づくりの現在をお伝えします。地域づくりの実践には、これから民俗学および民俗資料を生かしていくためのヒントがたくさんありました。

わたしは遠野で、次のような語りを複数の地域住民より聴きました。「遠野の河童が赤いのは、昔飢饉があったときに口減らしのために生まれたばかりの赤ちゃんを川に流した風習に依る。人間の赤ちゃんだから河童は赤い。」河童にまつわる民話を通して地域の冷害・飢饉を史実として語る言説は、一体どこから生まれたのでしょうか。言説の確立に至るまでを追いました【表1】。

年	遠野のできごと	思想史	日本のできごと
1908		柳田と喜善が出会う。遠野の口承文芸の聞き取りはじまる	
1910		『遠野物語』350部発刊。 柳田が知己のみに配布	日韓併合条約 大逆事件
1914	第一次世界大戦		第一次世界大戦
1918			米騒動
1933	三陸地震	佐々木喜善逝去	国際連盟脱退
1934	冷害・豪雨による大凶作		
1935		『遠野物語』増補版発刊。 広く一般の読者に普及。 柳田が雑誌『民間伝承』創刊	
1945	太平洋戦争 終戦		太平洋戦争 終戦
1962		柳田国男逝去	
1968		吉本隆明『共同幻想論』発表。 『遠野物語』と神話の比較進む	
1970	岩手国体。アンノン族の観光地として定着。「日本のふるさと」イメージの確立	『定本 柳田国男集』発刊	JRによる「ディスカバー・ジャパン」キャンペーン開始
80-90		小松和彦、赤坂憲雄らによる「異界」イメージの創出。『異人論』『異人論序説』ほか	
1993	冷害による大凶作		
1997	歴史考証進む。遠野常民大学『注釈遠野物語』発刊		
1999		赤坂憲雄が雑誌『東北学』創刊	
2012	異界・妖怪イメージによる地域づくり進む	『遠野物語』がバブリックドメインになる。二次創作進む	
2011	東日本大震災		東日本大震災

※遠野出身の郷土史家・佐々木大輔との談義（2023）に基づく。佐々木は『遠野物語』そのものの出版状況により、遠野物語史を次の4つに時代区分した。オリジネーターの時代（1908-1935）、フォロワーの時代（1935-1962）、アカデミシヤンの時代（1962-2012）、クリエイターの時代（2012-）へと時代区分を行った。これにより、地域づくりと一体の遠野物語史（ひいては日本民俗学史）をクリアに追うことができる。

【表1】『遠野物語』と遠野の地域づくりの変遷

遠野は民俗学史のただ中であって、一方では研究史を利用した地域づくりを推進し、他方では地域住民による内発的な地域研究の成果を残し、アカデミアにも多大な影響を及ぼしてきました。その過程で、河童という幻想とされてきた生物と、現実のできごとである冷害・飢饉そして口減らしの慣習が堅く結びつけて語られるようになりました。これは、『遠野物語』にみられる物語の要素をなるべく取り除き、徹底的に事実として語ろうとする運動であると言えます。



「民話は文字の読み書きもできない貧しい人の話」「埋もらされてきた人の話」と語る地域住民(2代目カップおじさん、2021)

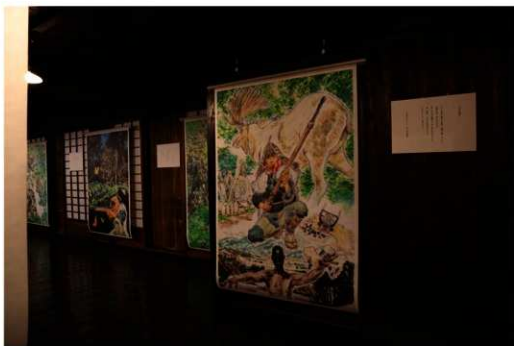
その一方で、『遠野物語』のファンタジーとしての要素に魅力を見出し、その行間を読むような創造的な運動も起こりました。とりわけ『遠野物語』が著作権フリーとなった2012年以降、この運動は多声的になっていきます。「日本のふるさと」として地方暮らしの理想郷のようなイメージをもつ遠野とはいえ、2000年代には昔ながらの語り部や農家はほとんどみられなくなっていました。そこに、『遠野物語』に語られた素朴な農民の生活を、芸術的な創造力によって復興あるいは新たに創造しようとする運動が起こるのです。アートの力による民俗文化の復興と言えます。ここでは、わたしが遠野で参与観察していた『遠野物語』を利用した芸術展をご紹介します。

芸術展は「Iwate, the Last Frontier -辺境に差す、はじまりの光-」と題され、『遠野物語』13話に登場する狐師「縫(ぬい)」の伝承をもとに創作した物語が展示されました。新たな物語を執筆したのは移住者の男性です。彼は広告代理店での勤務経験を活かし、移住後は遠野のブランディングを行っていました。その一環で『遠野物語』による企画を受注することになったのですが、最初に考案した企画で「まるで『遠野物語』のことをわかっていない!」と地域住民からバッシングを受けます。そのときに地域史家から「本は一旦置いておいて、とにかく野に出よう」と提案されフィールドワークに出かけます。『遠野物語』の現場である河童の出る川や座敷童子が住んだ屋敷を巡り、物語が実際の遠野の生活と接続していることに気づきました。例えば、遠野の屋敷神であるオシラサマは馬と人娘との二神一對の神なのですが、遠野の住居の構造では一つ屋根の下に人間の生活空間と馬小屋が同居しており、人間と馬とは親密な関係なのです。住環境がそのまま信仰に反映されていることがわかります。これまで『遠野物語』を読んでも何が面白いのかさっぱりわからなかったという彼は、物語の現場を歩くことで『遠野物語』の楽しみ方を教わったのでした。



芸術展「Iwate, the Last Frontier -辺境に差す、はじまりの光-」制作風景。物語を執筆した富川岳氏(移住者男性、左上)、イラストレーションを描いた五十嵐大介氏(漫画家、右上)、湿板光画という古い写真技法で写真を撮影したエバレット・ブラウン氏(写真家・作家、左下) (すべて 2021)

このようにして、移住者は『遠野物語』研究と研究成果を用いた事業を企画しはじめます。芸術展「Iwate, the Last Frontier -辺境に差す、はじまりの光-」は、彼とその仲間たちが企画したはじめての大型芸術事業でした。彼は『遠野物語』13話「山の霊異」に登場する狐師についての歴史考証をはじめます。この狐師についての伝説は多数記録されており、白鹿を追って千日山にこもった、妖怪青入道と知恵比べをした、とされる謎多き人物です。一方で、狐師の家系は特定されており、その家文書をたどった結果、狐師が遠野を境とする南部藩と伊達藩の間で暗躍した武者であることが判明しました。史実を突き止めた移住者は、謎の伝説と史実を往還する物語を完成させ、その物語に添えるイラストレーションを漫画家の五十嵐大介氏に依頼しました。物語に加えて、今の岩手の魅力を伝える若き職人や芸能者を、昔の写真機で撮影したエバレット・ブラウンの写真群を展示しました。



芸術展「Iwate, the Last Frontier -辺境に差す、はじまりの光-」展示光景。
遠野ふるさと村の古民家に物語・イラストレーション・写真が並んだ（2021.10）

今では、この移住者男性は民俗学者や文化人類学者を巻き込んで、民俗学による地域づくり事業をプロデュースしています。以上のように、遠野は、アカデミアによって形成された地域のイメージとうまく付き合ってきた自治体であり、民俗学と地域づくりが渾然一体となっていたのです。そのおかげで、地域住民ひとりひとりが地域の文化資源である『遠野物語』および「民話」の使い方をよくご存知です。（実は、『遠野物語』そのものは読んだことがないという人がほとんどなのですが。）児童や座敷童子などの「王道」の民話については、皆さん学校教育や市民劇、語り部活動をとらえて知っており、民話は遠野のものであるという自負があります。今日では、新たな観光資源と『遠野物語』のかけ合わせも盛んに行われています。

3. 民俗文化と地域づくり② 宮崎県椎葉村の事例

最後に、現在のわたしのフィールドである宮崎県椎葉村と民俗学の関係を追っていきます。椎葉村は柳田最初の民俗誌『後狩詞記』の舞台であると前に述べました。柳田が椎葉村を訪れた理由のひとつに、柳田の関心が農村社会の生業にあったことが挙げられます。椎葉巡見当時の柳田は農商務省（現在の農林水産省）に勤める政府の官僚でした。柳田は、東大法学部を卒業し官僚になったエリートコースだった中の人であり、研究者ではなかったのです。柳田は出身地の兵庫県で経験した飢饉を強く記憶しており、「何ゆえに農民は貧なりや」（柳田 1935）という課題から自らの学業を出発させました。柳田は農商務省で農業組合に関わる法制度の整備に関わっており、全国の農村社会を遊学していました。その旅先のひとつが、ここ椎葉村だったのです。九州周遊の道中、柳田は各地で椎葉山についての噂話を耳にします。焼畑農業をしているらしい……焼畑の山に自生する茶を商品作物としているらしい……等々。今でも椎葉村の生業として継承されている焼畑農業は、当時でさえ日本列島において稀少な民俗文化だったのです。

数々の噂話をもとに訪れた椎葉山で、柳田が発見したものは狩猟の故実を記録した古文書でした。この文書をもとに記録した『後狩詞記』には、現役の大獵師が継承する山の儀礼作法が多く残っています。例えば、大獵師が山に入る前になるとなる唱教や猪が獲れたときに山の神に捧げる祭祀は現在も伝承されています。大獵師が獲物に気づかれないように振る舞うために山中で使用する山言葉も、現在も使用されているものです。「ハエ」（山の中腹）や「ニタ」（猪が身体を擦り付ける泥沼）といった、山中の地形を指し示す言葉は今の地名や屋号にも名残があります。

椎葉村は、柳田の時代から現代に至るまで、中世以前にまで遡る民俗を伝えているという点で、民俗学的に際立った特徴をもっています。狩猟焼畑は縄文時代から続く生業とされています（このあたりは考古の先生方から教わりたいことです）、神楽や臼太鼓踊りといった芸能は平安期にまで遡ると言われています。こうした生業や祭祀は、伝統技法や近代技術、神道や仏教といったさまざまな対立的なことがらをどちらもうまく共生させ、独自に融合させ、絶えず変容しながら持続してきました。

わたしは村にある椎葉民俗芸能博物館の学芸員を務めています。当館の特徴は、まさに展示内容のすべてが現在も暮らしのなかに息づいているところにあります。これは全国の多くの歴史民俗資料館とは異なる状況ではないでしょうか。博物館がオープンして28年が経つのですが展示内容は古びておらず、充実した調査研究のもとに制作されたのだな、と毎日館内を観ながら感心しています。実際に、神楽（本田安治 1962）、狩猟（千葉徳徳 1969）、焼畑（野本寛一 2004）など各分野で厚い民俗誌が描かれています。調査の成果により椎葉神楽は村内26ヶ所がそれぞれ独自の



椎葉民俗芸能博物館外観（2023）。人口2,200人の山村に4階建ての博物館が建つ

舞や拍子、神事を継承していると明らかになり、国指定無形重要文化遺産（1991）に登録されました。現在も約半数の保存会が夜通しの神楽祭を催行しています。焼畑農業は世界農業遺産（2015）に登録され、村外機関による調査研究と村内団体による継承活動が進んでいます。小学校での焼畑実習も50年におよぶ歴史があり、地域住民が児童と学校の先生に向けて焼畑の技術を教えています。こうした実践は、地区の消防団や青年団、婦人会、PTAなど総出で行われています。文化継承のために各自仕事の休暇が取りやすい、あるいは業務として行事に参加すべきという空気が醸成されていることが、村の暮らしを成立させる大切な基盤になっています。

わたしは当館展示を気に入る一方で、せっかく椎葉に来られた方には博物館ではなく、村の方々とおしゃべりしたり山に入ったりと、実際の暮らしの現場をご案内したいと考えています。村にはコンビニがなくスーパーが1軒のみ、日曜は営業していません。しかし各地区に小さな商店が点在し、地元の方が必要とされる品々（食糧、農機具の部品、水道管など）だけを揃えています。資本主義的に大量生産大量消費をしなくてよい椎葉の生活は、真にサステナブルではないでしょうか。山奥暮らしは一見不便であり土砂災害も多発しますが、だからこそ住民ひとりひとりがインフラ技術を手放していないことが強みです。山水を引いてくる、道路を整備する、家や神社を建て直す……等々。そして、こうしたインフラ整備を行うにはやはり共同体のつながりが不可欠です。生活技術を手放していないことと、共同体の紐帯を維持していること、この2つが椎葉文化の重要性であると考えています。



焼畑火入れの様子（2024）。山林の足元の腐葉土を灰にして養分とし、雑穀を栽培する

おわりに

民俗学史に名を残す2つの地域での研究と暮らしの往還をご覧いただきました。遠野では現代的文化が参入し近代以前の生活様式の多くが消失してしまった一方で、民俗文化がアートという新たな展開をみせていました。一方の椎葉は近代以前の生活を今にまで伝えており、共同体の維持について学ぶところが多い地域です。

緻密な民俗調査を実践しその成果を住民が利用することは、どの地域でもできることです。わたしはこれが民俗学の強みだと考えています。人間は衣食住を手放すことはできません。日常生活が営まれている以上、どこでだって民俗調査はできます。わたしは民俗と民俗学をこれからどうするのか、研究者としても生活者としても考え続けていこうと思っています。

【参考文献】

- 柳田国男. 1935「郷土生活の研究法」1998『柳田国男全集』28巻. 筑摩書房
 柳田国男. 1957「日本文化の伝統について」『近代文学』
 谷川健一. 1962「柳田国男の世界」『日本読書新聞』1962年8月20日号
 本田安治. 1962『民俗芸能 郷土に生きる伝統』社会思想研究会出版部
 後藤総一郎. 1964「柳田国男と常民・天皇制・学問」『思想の科学』1964年4月号. 思想の科学社
 千葉徳徳. 1969『狩猟伝承研究』風間書房
 伊藤幹治編. 1972『現代のエスプリ 柳田国男』57. 至文堂
 野家啓一. 1996『物語の哲学 柳田国男と歴史の発見』岩波書店 *第2章は本書に着想を得ている
 野本寛一. 2004『山地母源論』I. 岩田書院
 斎藤幸平. 2019『大洪水の前に マルクスと惑星の物質代謝』堀之内出版

1995 年からの飛騨市内での民俗誌調査・実験考古学の展開

山田昌久（東京都立大学）

はじめに

私が初めて旧宮川村を訪れたのは 1993 年のことであった。富山へ続く国道の整備が始まり、それに伴う遺跡の発掘調査が進んでいて、西忍地区の宮の前遺跡の発掘調査では、湿地部から遺跡に残りにくい植物質の遺物が発掘されていた。発掘を担当していた林直樹氏に連絡を取って資料見学を行ったのだ。その遺物の中に、後期旧石器時代の地層から発見されたものがあり、「木製の槍先なのではないか？」とのうわさが広まっていたため、それを見たいと考えたからであった。

その槍先形の遺物は、針葉樹の分枝部＝枝の付け根の部分（節の部分）で、人工的に成形したものではなかったが、削られたと考えられなくもない箇所があった。私は、最終的に発掘調査報告書で出土木製品の項を、分担執筆することになった。縄文時代の建築部材などを報告したが、例の遺物は旧石器時代の加工痕とは断定できず、人工品でないだろうと記述した。

東京都立大学に勤めた後に、報告書の執筆のために数回旧宮川村をおとずれたのであるが、その際に飛騨の山峡地帯に残されていた村人たちの生活や祭り（どぶろく祭り）、そして「積雪地帯の生活用具」が収集されて「国指定有形民俗文化財」になっていた道具類に接したことで、30 年を越えて現在に至る「飛騨の生活誌調査」を始めることになった。

東京都立大学の実習として毎年夏に 10 日間の調査を行い、季節ごとの生活ぶりをお聞きするために、春秋冬期にも調査に赴いた。毎年、調査成果を報告書に纏め、研究機関にも配布したが、調査に関わっていただいた各集落の方々にもお渡しした。毎年訪れる私たちを、村の集會に誘っていただいたり、祭りに招いていただいたり、宴席を催していただいたりした、飛騨市各地の多くの方々のお顔は、今も脳裏に浮かぶ。日曜日に古川にパチンコに行こうと誘ってくれた種蔵集落の方は、今でも忘れられない。

私たちの活動の拠点、「国指定有形民俗文化財」に指定された民具類を収蔵展示していた民具館に、新しく遺跡資料を展示する建物を増設して改名された「飛騨みやがわ考古民俗館」であった。調査には東大・京大・筑波大・新潟大・岡山大などの国立大学の大学院生・学部生や、早稲田大・慶應義塾大・明治大・國學院大・法政大・立命館大・奈良大などの大学院生学部生が参加して、多い時には 25 人の調査団が宮川村内で合宿する規模に膨れ上がった。参加した大学院生たちの中には、京都大学・北海道大学・岩手大学・東京都立大学・国学院大学などの教員になっている方々や、文化庁・奈良国立文化財研究所・元興寺文化財研究所・都道府県の埋蔵文化財センター・博物館等、第一線で活躍されている方々がいる。

その調査成果は『人類誌集報』として随時刊行し、研究機関や調査地の方々に配布してきた。現在も飛騨市域での調査は継続しており、これからもフィールドワークが積み重なっていくと考えている。



図1 民俗誌・実験誌・遺跡誌調査活動の成果として刊行してきた報告書群

1 考古民俗館の収蔵民具の調査

活動拠点となった考古民俗館では、国指定重要民俗文化財に指定された生活用具類が展示・収蔵されていた。展示は、焼畑コーナー・常畑コーナー・春木山コーナー・山仕事コーナー・樽作りコーナー・川漁コーナー・狩猟コーナー・機織りコーナー・祭礼コーナー・運搬用具コーナー・豆腐作りコーナーなど、生活用具が仕事ごとに分けた形になっていた。

一方、収蔵は用具単位で収蔵されていた。また、一種類の生活用具が大量に収集されてい

で、集落名・使用者名が分かる札が付けられていた。旧宮川の生活用具収集作業が、各集落に及んでいて、広く声がけて生活用具を収集したことが分かった。

旧宮川村は、宮川の河岸段丘面に作られた集落と、宮川にそそぐ沢をのぼった集落とから構成されていて、その立地が保有する生活用具の種類や使用量に影響を及ぼした。たとえば、同じ雪掻き用具＝バンパ（コスキ）であっても、段丘面の集落で使用されたものと、沢筋をのぼった地点の集落で使用されたものとは、異なっているように見えた。坂道除雪バンパが必要なので、道路除雪用の消耗頻度が高まったためと考えられた。また、合掌作りの家屋と、養蚕のために二階を広げた家屋とは、屋根の傾斜が異なるために除雪作業が異なる。長さ3mを超えるバンパの収集地は合掌作り家屋が存在する集落から収集されていた。

個人で作るか地元の大工さんに作ってもらうバンパは、柄の長さや篋の形を指定して作られるため、変異が認められた。しかし、バンコ炬燵のような既製品購入品は、採集集落に関係なく形態差が無い生活用具であった。

斧や鋸は、形・厚さ・重さに変異が多く認められた。斧柄は使用者の体格や作業地の地勢などに合わせて用意された部材だが、鉄斧や鋸などは村内の鍛冶屋さんを作るのではなく村外の特長な工房をもつ生産地で作られたものなのだろう。すると斧や鋸の変異は、目的（機能）別につくり分けられた既製品だと考えられた。

織機については、解体して全部材の記録をおこなった。限られた家屋空間では織機を解体して保管することもあり、部材に組み合う箇所には記号を付けて分解・保管していた。私は、目にした多量の民具が、遺跡出土の遺物を形の違いや発見量を考える重要な鍵を握っているのではないかと考え、生活用具の調査や使用者への取材を行なおうと決めた。

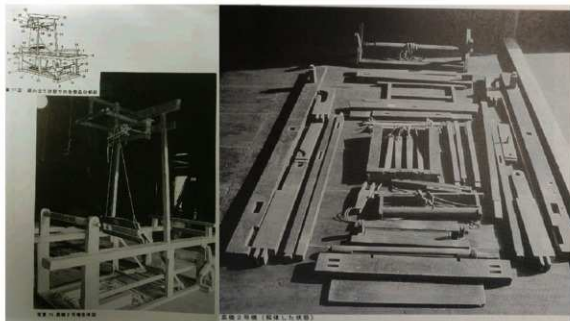


図2 考古民俗館所蔵高機の分解調査



図3 仕事別に組成された生活用具集合写真

2 旧宮川村・旧神岡町・旧河合村・旧古川町の人々のくらしと生活用具の取材

旧宮川村は、江戸時代には宮川を挟んで郡が異なっているし、明治期からは行政村として坂上村と坂下村に分けられていた。その境は段丘面が無い峡谷になっていた。中には宮川の兩岸に自然村が存在している地区があり、川を越えた交流があったことも考えられた。旧宮川村の生活は、自然村毎の家々のくらしではあるが、自然村間の交流も日常的にあった。江戸時代の記録には、旧河合村の山中紙生産のために、宮川村の自然村からも楮を提供した記録がある。また、明治時代の教育や軍充実を図った国策＝地租改正で、屋敷回り以外の各村の領域内の山林の所有が定められたので、山林の利用の仕方とも変わったはずである。

種蔵では、村外から入手した物資や村外からの入村者について、聞き取りを行った。富山方面からの「歩荷さん」による衣料や食材の話を教えていただいた。また、焼畑作りの作業・焼畑での作物の変化などをお聞きした。記憶に残っているのは、数年の焼畑生産の後にクリの木を植えて、そのクリの木を住居用材としたことを伺ったことだった。村域での計画的な物資調達構想は、縄文時代の定住期にも構想されていた。私は2001年に建築フォーラムで、縄文里山での「栗林経済」＝世代毎の里山循環利用を発表・論文文化していた。

杉原では、昭和に木挽き作業を行っていた方から村外へ出す板材の生産に関わっていた話をうかがった。村外からの流入物資以外に村外への流出物資もあり、昭和期には地産地消を主としながらも、流通経済にも関わった生活を知ることができた。高山の民俗村で板葺き屋根を仕上げた古川町在住の方からは、飛騨のクリ板屋根の歴史を伺うことが出来た。山間の自然村では共有萱場から得る茅を使った屋根の家々があったが、家屋数が多い町場では萱場が確保できないために、板葺き屋根の家々が有ったことをお聞きした。

旧宮川村では富山の稲作農家に馬を貸し出して代替に米を受け取っていたのであったが、家畜馬用の草を得る草場の存在は、すでに十分には聞き取れなかった。飛騨萩原で脇田雅彦氏が製作した集落の草場の距離は、小規模村では1～2kmであったが大規模村では6～7km離れた地点からも草を取っていたことが示されていた。

森安では、納屋に取められた生活用具の見学と、使用時の道具選択の話をうかがった。納

屋には斧や鋸が多数保管されていたが、なぜそのような数の道具があるのかをお聞きすることができた。伐採地の地勢や伐採木の種類や太さで選択する斧や鋸は選択され、木割作業で扱う斧は身厚の物を使い、ハツリ作業には刃幅のある斧を使う、という話をお聞きした。民具研究でよく説明されることではあるが、作業者による納屋での道具選びの実際を拝見することが出来た。

なお、種蔵・洞・弥宜ヶ沢上・西忍では屋敷地の作図を行なったり、洞から考古民俗館に移築された民家の作図作業を行なったりした。町場の神岡町では水道整備や水屋の話をお聞きしたり、河合村では春木山と紙漉き作業を調査させていただいたりもした。また機織りに関しては、実際に作業経験のあるお二人に、経糸づくりから織りにかけての実験を行っていただいた。

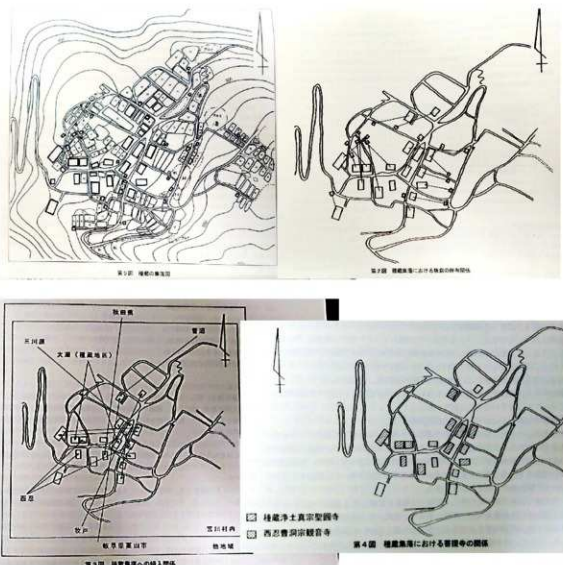


図4 種蔵集落部空間関係の記録

3 実験考古学

実験考古学では、石斧の伐採実験・縄文土器での調理実験（燃料材使用量実験）・クリの実管理実験を行った。石斧では、思ったよりも早く伐採ができ、太さ 15~20 cm のクリの木は、1000 打撃・10 分程度で伐採できた。考古民俗館では縄文土器を復元して煮沸実験を行った。縄文時代には掘りくぼめた炉・石で囲った炉が使用されている。単に地面に土器をおいて熱するよりも、3 分の 2 の薪の量で調理ができることが確かめられ、縄文時代でも里山の木を節約使用したことが分かった。

居住地に 10 の食事集団がいるとすると、1 年間に使用する燃料は 15~20 本の木を燃やす必要があり、それが 10 有るとすると 150~200 本の木を切る必要があった。民俗取材では春木山では一軒で 20 本くらいのコナラの木を切ったことをうかがったが、縄文時代の村もかなりの森林干渉を行っていたことが分かった。これに加えて、住居建設が有るとすると、一棟で 30 本くらいのクリの木を使ったことが判明したので、縄文里山は 20 年ほどの時間で萌芽更新を図る林であったことが分かった。

クリやドングリの実を採取して保管する技術や、実の中にどのくらいのムシ（ゾウムシの仲間や蛾・蜂の仲間）が卵を植えているかの実験を行った。小学生に時代に自由研究でカシの実に数個の卵が植えつけられていたことを研究しようとした。ファール昆虫にはカシギゾウムシは一つの実に卵を一つしか産み付けないと書いてあった。ファールは間違っていると考えたのだが、父親からその卵がみんなカシギゾウムシのものかを調べないとダメと諭された。

しかし、大分県竜頭遺跡出土のイチイガシの実にはゾウムシの幼虫が 6 つも残されていた資料があった。60 過ぎに発見した遺物は、10 歳の私の疑問を解決してくれた。そこで、縄文人はせっかく集めたクリやドングリを水につけてムシ殺しをしていることの意味を、考える実験を行った。旧宮川村西忍に沢水を引き込んだ水枡を設置して、集めたクリを漬けて経過観察をした。「低地貯蔵穴」と呼ばれている遺構があり、その中に直接または籠に入れた木の実が発見される。第一ずっと水に漬けていたら実のデンプンが溶けてしまう。だから私は、貯蔵目的と考えるのは間違いで、産み付けられた卵が幼虫になるのを防ぐ作業の施設だとした。実際に 2 か月以上つけると実が溶け出すことが分かった。

それ以上に重要な発見が有った。西忍で採取したクリの実は、9 割以上に虫害があることが観察された。ところが、石川県能登町で同時期に行った実験では 1 割弱の虫害しかなかった。自然放置されたクリ林には周囲に虫が多く、実には卵が植えられることが多いのに対し、毎年除草やクリ拾いをしている里山のクリ林には虫が少なく、実に卵が植えられることが少ないことが分かった。村が継続すると縄文里山のクリも虫が少なくなったと考えるようになった。大分の遺跡のドングリも水の穴に残されていたものののだが、古い穴のドングリには虫がいるのに、新しい穴のドングリは虫の数が減っていた。

林さんから塩屋のおばあさんから栃の実を発酵してあく抜きする技術が有ったことを聞いたとの話をもらった。昔のことを思い出して発酵あく抜きをしたら、蚕が死んでしまった

との話だった。考古学者の渡辺誠はあく抜きの研究を行った研究者として有名であるが、実は昭和のあく抜きの取材は、日本に養蚕が展開した後の技術で、そのまま縄文時代に当て嵌めるのは間違いなのではないかと考えた。

同じ発酵あく抜きの技術が残る京都の丹後地方には、もう一つ発酵処理をする技術が残っている。藤の蔓繊維から服を作るとは日本各地で行われていたが、木綿が普及する江戸時代以降、藤布作りは激減した。藤蔓の皮を剥いて鬼皮を除去した韌皮部分を、実は灰汁で煮て柔らかくする技術であった。万葉中にも「海士の藤布」と歌われている布は、現在の日本では、ほとんど使用が認められない。この技術を行うと「こわばった」繊維が柔軟になり、身体にフィットする布になる。縄文時代の鹿児島県の「組織痕土器」にも編布痕・編目痕交差組み（織り）の布が有ることは有名だが、その繊維は柔軟に変形している。現在各地の遺跡博物館で復元されているカラムシの編布貫頭衣は、ピンと張って平面になっているが、縄文時代の人々はカラムシの繊維も灰汁炊きして柔軟化作業を行っていたのに、現在の遺跡博物館は縄文時代人の知識を正確に復元していないのである。



図5 流水水杓の設置をしてのクリの実管理実験

4 研究面から……飛騨市で調査・実験の継続を始めた学術的背景

新進の考古学者であった？私が、なぜ飛騨の山峡の地で民俗誌を調べたり、実験考古学を

始めだしたりしたのかというと、それは考古学や民俗学の描く過去や現在の人類の描き方に、何か違和感を抱いていたからである。それは、大航海時代後にヨーロッパ近代が考えた地球上の人類社会の認識＝未開・野蛮・文明といった区分を、時間軸の中でも発展的に描こうとした国ごと地域ごとの歴史が、実は人類の文化や社会の実態を説明できていないのではないか、ということであった。

20 世紀に入って、縄文時代の住居が発見され、縄文人の家族が描かれるようになった。千葉県のはら山貝塚では、「竪穴住居址」にそこに住んでいた家族のものと考えられた人骨群が発見された。縄文時代の竪穴住居には5～6人の「家族」が住んでいたという姿が、説明されるようになった。近現代とおなじような「縄文家族像」が生み出された。しかし、現在の古DNAを使った研究では、竪穴住居内の人骨群には血縁関係が無いことや、大人と子供の合葬された墓の骨にも、血縁関係のないものが有ることが示され始めた。縄文時代人の集団規模、経済単位の研究が始まってきているのが、現在の研究段階である。

定住以前はその場にいる人が集団をつくっていた、「知己社会」である。縄文時代の早期前半以前の9000年前の土器は、九州から東北地方まで単純な同じ文様の土器であった。しかし、村を作り始めたそれ以降の縄文土器は、地域毎に異なる文様を見せ始める。村での暮らしの継続は過去の見知らぬ先人の墓を認識し、未来の子孫のために里山を使いまわしている「系統社会」が生まれ、その村が隣の村と関係をもった「地域社会」が生まれた。考古学者はこの社会形成を説明すべきなのに、つまり日本の土地の中に複数の社会ができ始めた時代として「縄文時代」を分解して社会形成をすべきなのに、「定住型の狩猟採集民」などと文化人類学の定義を借用して、一つの時代一つの文化で納めて「しり顔」をしている。

明治時代、E.S.モースが大森貝塚で縄文土器を発掘した調査報告書には、日本には「縄文土器を使用していた」「先住民族」がいたと記述されている。大森貝塚発見の人骨には、切り傷がありそれは人が人を食べていたからだ、と記述されている。その頃の日本の歴史は、神話をもとに日本民族の起源が考えられていたが、「縄文土器を使用していた人々は、それ以前の【先住民族】なのだ」と考えられていた。そこで、モースの描いた食人の習慣は、日本民族のものではないことになった。当時の日本人は自分たちの歴史とは別のものと理解した。

ところが、第二次世界大戦の敗戦後、神話で描いた歴史のはじまりは遺跡情報をもとに書き直されることになり、「縄文時代」「弥生時代」「古墳時代」が日本史の中に位置づけられることになった。ヨーロッパでもアジアでも、こうした市民国家の歴史を先史時代まで国家史として描く国は、実はほとんど無い。韓国では統一朝鮮時代の前には三国が並列した歴史が描かれているし、中国でも「中華」という概念の形成がいつだったのかの考古学的議論が盛んである。新石器時代の中に「龍」のモチーフをもとめ、そこに「中華」の始まりが有るのではないかとという研究もあるが、一般的には黄河・揚子江流域の青銅器文化に「中華」の考えの始まりを見出している。

つまり、旧石器時代からの知り合い関係で生活する「知己社会」は、縄文時代の前半期の

村を作ることが一般的ではなかった時期までつづいている。重要なのは、縄文時代の早期末以降に、日本各地にそして海辺から山間地に居住地が作られるようになった時点で、その村に住む人々が有った事の無い先人やその居住地を引き継ぐ子孫を理解した、「系統社会」に変化したことである。その村は近隣の村々との関係を恒常化するようになったので、使用していた縄文土器に地域の模様や形が共有されるようになった。しかし、住居ごとに現在のような核家族が住んでいた訳ではないようで、最近の研究では同じ住居に残っていた複数の人骨のDNAには血縁関係が認められないことが判明した。また、大人と子供と一緒に埋葬されたお墓の骨のDNA調査からは血縁関係が無い大人と子供と一緒に埋葬されていることが有ることも分かってきた。複数の堅穴住居で居住した30人程度の大家族が、縄文時代の経済単位だと考えられ、このような住居遺構群はロシアや朝鮮民主主義人民共和国の遺跡でも確認されている。



図6 アジア極東の先史社会の住居構成から分かる大家族(経済単位)と小空間経済対応人数

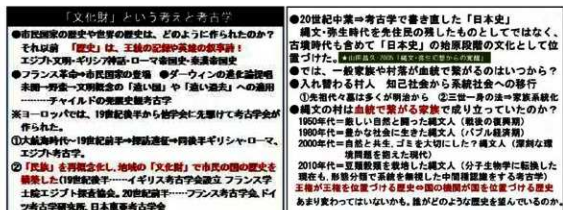


図7 フランス革命後市民の国が始まり、その歴史系列が考えられるようになった

「竪穴住居」に住んだ数名の「縄文人」を家族とすることを考え直す必要性が考えられるようになった研究報告は、旧宮川村での調査活動を毎年纏めた東京都立大学の報告書、『人類誌集報』として1997年から刊行されている。その最初の冊子に併載されているのは、岩手県の遺跡で明らかになった縄文時代居住地遺跡の竪穴住居址群の分析であるが、そこでは一つの竪穴住居に一家族が住んだとは考えられない建物址群が示されている。居住地周辺の限定された空間で多様な作業を分担して生活するには、現代の核家族のような単位ではなく（縄文時代人の寿命で何人の子供を作っていたかは不明であるが）、30人程度の大家族＝経済単位集団が有ったと考えないと、中緯度帯の中国中心部の農耕を始めた新石器時代と別の、極東アジア小空間で基本的に自立経済を行う人々は、核家族のような規模では、生活を進めることが困難だったと考えられた。飛騨地区の合掌集落のような大家族の形は、縄文時代に生まれていたのかもしれない。合掌家屋を崩した生活に移行しても、生活を維持するためには、村を構成する家々で助け合う「結」の存在があるのは、総出で助け合うことが必要な同村居住者の生き方だったと考えられる。

明治時代の農漁村の居住者にも名字を与え、家族ごとに家を引き継ぐことや村を引き継ぐことは、今その終わりにあり、どのような家族像を描き直すこと、集落を続ける構想も描き直すことに直面している。

「どうしようか」ではなく、「こうしよう」を実行するのは、今なのである。

おわりに

私の飛騨みやがわ考古民俗館を拠点とした活動は、70を超えた今でも続いている。また、日本中に実験フィールドを作って地域生態系毎のデータ蓄積も進んでいる。生涯現役を標榜しているが、30代の仲間の多く、私の価値観とも異なった研究展開が始まったのはうれしい。でも、「ジジイはまだやるぞ」なので、「おわりに」ではなく、「まだまだおわらないぞ」をまとめの言葉にしておきたい。

飛騨みやがわ考古民俗館 30 周年記念シンポジウム

飛騨みやがわ考古民俗館の歩みと新たな展望

発表要旨

発 行 日：2025 年 5 月 18 日

編集・発行：飛騨市教育委員会

岐阜県飛騨市古川町本町 2 番 22 号 TEL：0577-73-7496

印 刷：オフィスぼんぼり



石棒クラブ

飛騨市の文化財
ホームページ：
<http://hida-bunka.jp>



石棒クラブ 作成

飛騨みやがわ考古民俗館
の楽しみかた 動画



飛騨市観光協会

この動画は、たったり分で、飛騨みやがわ考古民俗館の見どころや楽しみかたをしょう動画です。是非動画もご覧いただき、宝川のディープな冒険へもどりましょう！